
消せない傷

ふるーつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消せない傷

【Nコード】

N3969D

【作者名】

ふるーつ

【あらすじ】

原作とは違う設定が数箇所あります。○新一と蘭は幼馴染みじゃありません。○蘭は幼い頃に両親を亡くしています。○有希子ママは女優を引退してなくて、新一は両親と暮らしています。――工藤家で家政婦として働くことになった蘭。そして新一に惹かれ始め・・・？

1. 見つけた仕事（前書き）

あらすじをちゃんと読まれた上でお読み下さい。

1. 見つけた仕事

高校に行きながらできる仕事を探していて、その話を知った。――住み込みの家政婦。

昔から、特に秀でたところを見つけれない自分には、合った仕事だと思ったから。

10年あまり前に両親を亡くして以来、蘭は孤児院で育った。実のところ、高校に行くかどうか自体を迷ったのだが、長年お世話になっている人に「高校ぐらいは出ておきなさい。将来きつと役に立つから」と言われては、逆らえなかった。

そして、家政婦の話を持ってきたのも、その人だった。

「もちろん、仕事は家事一般だから、花ちゃんにぴったりだと思うの。ほら、あなた住み込みの仕事探してるっていったたじゃない？」
花ちゃんとは、蘭の愛称だった。理由は簡単、「蘭」は花の名前だから。

家事は昔から慣れているし、何より住み込みという条件が気に入った。

探していたのだ。孤児院を離れるための事情を。これ以上、あそこにはいたくなかった。

あの、優しい場所には。

1. 見つけた仕事（後書き）

今連載中の方がもうすぐ終わるというのに、ちょっと思考が脱線しております。なにせ、思いついた時に思いついたままに話をつくってまです。

ついこの前、ふっと思いついたこの話。多分、10話までいかなと思います。

2. 面接にて

応募してみると、意外にもすんなりと面接まで進んだ。

初めて訪れた工藤邸は、親子3人だけで住むには勿体なさそうな屋敷で、確かにこれなら家政婦が欲しくなるのもうなずけた。むしろ、これまで家の管理を夫人ひとりでやっていたという方が驚きだ。

名前を告げると、すぐに居間に通された。そして初めて、実物を見た。――世界的推理小説家・工藤優作を。

「初めまして、毛利蘭さん。早速だが、なぜ今回の話に応募したのか、聞いていいかな？ 君は、まだ高校生らしいが？」

思っていたよりずっと物腰柔らかな声音に、蘭は多少リラックスして話せた。

「私、幼い頃に両親を亡くして、孤児院で育てられたんです。でも、いつまでもそこにいる訳にはいなくて、仕事を探していました。そのとき、今回の話を知ったんです。

幸い、炊事や洗濯などは昔からやっていて慣れてますし、高校もここから近いですし」

「ああ、君は息子と同じ帝丹高校だったね。じゃあ、あいつとも仲良くやれるかもしれない」

「あ……はい」

そういえば、彼の一人息子は蘭と同じ帝丹高校の2年生だった。確か、高校生探偵とかいって、騒がれているっけ。

「それで、注意事項があるんだが」

「あ、はい」

回想にふけっていた蘭の思考は、優作の次の言葉で現実に戻された。

「実は、世話してほしいのは息子のほうでね」

……は？

疑問を顔中で表現した蘭に、優作は苦笑した。

「いや、変な意味じゃないよ。私たちはこれまで、自分のことは自分でやってきた。もちろん、息子もね。」

しかし息子は今、探偵として警察にも頼りにされている。それ自体は喜ばしいことなんだが、最近は捜査のために、日々の生活を省みなくなっている。そこで、君に健康状態の管理を頼みたいんだ」

蘭は、返す言葉に迷った。……当初の話とは、かなり違うのだ
が。

「でも、部屋も用意してるし、毎週お休みもあげるつもりよ」

黙って聞いていた優作の妻、有希子がとりなすように会話に入
った。

軽く目をみはった優作に気付かず、蘭は改めて考えた。

ちょっと釈然としないところはあるが、（待遇面でも）多分これ以上の条件はない。今孤児院を出ても住む所はないし、まず高校はちゃんと卒業したい。

蘭は、ゆっくりと立ち上がった。そして、頭を下げた。

「よろしくお願いします」

夫妻は、顔をほころばせた。

2. 面接にて（後書き）

書いてみて初めて気付いたんですが、「家政婦の雇い先が工藤家」だという基本設定、まったく説明がありませんでしたね。すみませんでした。

3. 面接を終えて

「よかったわ、あなたが引き受けてくれて」
蘭を見送るために一緒に出た玄関先で、有希子は嬉しそうに言った。

「優作もね、ほっとしてると思うわ。ああ見えて」

「どうしてですか？」

多分、応募したのは自分だけじゃないだろうと、蘭は思っていた。
なにせ、家族全員が有名人というとてもない家だ。

「だって、あなた新一と同じ年なんだもの」

「？」

——それが何なのだ。

有希子は、心なしか母親の顔になった。

「新一はね、昔から頭も要領もよくて、何でもできる子だったの。
ただ、そのせいで同世代の子と打ち解けられない所があるのよ」

「え？」

蘭は驚いた。学校で時々見かける彼は人気者で、およそそんな風には見えない。

「もちろん、表面上は友人も多くて人気者よ。さっきも言ったけど、要領はいいから。でも、頭脳がずば抜けているからかしら、なんていうか……壁をつくっている所があるのよ。ものが同じようには見えないのかしらね。」

だから、あなたがそばにいてくれれば、あの子も少しは変われるんじゃないかと思ってるのよ」

「……そうなんですか」

うなずきながら、蘭は心中で反論していた。私みたいな人間じゃ、かえって見下されるんじゃないですか？と。

しかし、結果的に、この夫妻の決断は、大いに身を結ぶことになる。

孤児院に帰ると、まっ先に院長に呼ばれた。

「どうだった？うまくいきそう？」

「ええ、先方もいい人のようで。奥様に、とても喜んでいただきました」

「そう。よかったわ。でも……寂しくなるわね」

そう言いながら、彼女は笑顔を崩さない。昔から、相手を困らせるような顔は極力しない人だった。

「大丈夫ですよ。時々はお休みをもらえそうですし。ここから遠くないですし、その気になれば、いつでも帰れます」

彼女を励ますように言う蘭が、今言った自分の言葉に動揺しているとは気付かず、彼女はまた笑った。

「がんばってね、花ちゃん」

彼女の激励に笑顔で頷きながら、蘭は部屋へと向かった。

4. 意外な素顔

初日になって、その事実には唖然としたのは、夫妻の一人息子。新一だった。

「は！？何考えてんだよ！？んなこと勝手に決めるなよ！第一、オレは自分の面倒ぐらい自分で見られる！」

「それができてないと判断したから、彼女を雇ったんだよ」

優作が、静かな口調で息子の口をふさぐ。

「君は高校生探偵として衆目を集めるようになってから、生活が不規則極まりない。それを修正するべき私達も、自分の仕事で忙しくて、なかなか気を配れない。それを、彼女にお願いしたんだ。」

一応言っておくが、彼女には大抵の場合、自らの判断でやらってもらう。私達への報告義務は一切ない。安心しなさい」

反論を封じられた新一は、不機嫌そうな顔のまま、今度は蘭に目を向けた。

「あんたはいいのかよ？毛利さん」

「え？」

「昨日まで同級生だったオレが、いきなり雇い主の息子になる上に、休み以外はほとんど、顔を合わすことになるんだぜ？嫌じゃねえか？」

「……」

蘭は少しおかしくなった。日本警察の救世主なんて呼ばれている彼が、こんな顔をするなんて。

「残念ですけど、まったくの他人だった人と暮らすのは慣れてます。最初はちよっと戸惑うかもしれないけど、すぐに慣れますよ」

そう言っただけで笑ってみると、あえなく口を封じられた新一は、眉間にしわを寄せ、あらぬ方向に目をそらした。

その後、ちよっとからかいを込めて「坊ちゃまって呼びましょう」

か？」と言ってみると、今度は半目で睨まれた。結局、お互い家では「さん」付け、学校では今まで通り名字で呼び合うことで決着し、それを微笑ましく見ていた夫妻は部屋に戻っていった。

この時すでに、蘭には予感があったのかもしれない。彼らは、自分の中の『闇』を見抜く人たちなのだ。

——孤児院から出ることで逃げようとしたあの温もりに、結局自分のはまってしまうのだと。

4. 意外な素顔（後書き）

ごめんなさい、前言撤回です。というのも、10話越しそうです。次から、本題が出てきます。

5. 突然の、涙

夫妻がなぜ自分のような家政婦を雇ったのか、蘭は最初の1週間で痛感した。

家主の優作は大抵書齋にこもっていて、それ以外では取材や打ち合わせと出して出かけていく。

夫人の有希子は、朝早くに出かけて行って夜に帰宅というパターンが多い。それでもオフの日には夫と息子の食事など用意していたというから、相当パワフルな女性だ。それだけに、蘭に1番感謝の言葉をくれるのも、彼女だった。

そして1番ひどかったのが、息子の新一だった。生活パターンという点では、有希子の方がはるかに規則正しい。同じ高校に通っていないが、なぜこれを知らなかったのか悩むほどだった。

ひとたび捜査に加われれば、まさに寝食を忘れる。そして帰宅が深夜になることも珍しくないので、蘭は夜食だけ作って先に寝るようになった。知名度も社会的信用もある彼と違い、学校には毎日ちゃんと行かないと、日数に影響が出る。

ひと月もたつと、さすがに新一も慣れた。さすがに真っ暗ということはないが、灯りを抑えてある家に帰り、リビングでさりげなくラップにくるまれた皿を見つけると、（仕事のマメさへの）呆れ半分、感謝半分で、自然と笑みがこぼれる。

そしてふと、彼女にあてがってある部屋を見て、灯りがついているのに気付いた。

「あれ？まだ起きてたのか」

一応ノックして、声をかける。

「宿題か？蘭さ……」

言葉は途切れた。そして、また口許が緩む。

蘭は、問題集とノートの上に頭を乗せ、転寝うたたねしていた。

「んなとこで寝てると、風邪ひくよ」

小さめに声をかけながら軽く彼女の肩を揺らした新一は、ぎよつとした。

彼女の目が、スタンドの淡い光に反射して、光っていたから。
それはまごうことない、涙だった。

5. 突然の、涙（後書き）

今回、バックを藍色にしてみました。白抜きの文字は避けてたんですが、夜をイメージしまして。
読みにくければ、ご意見お願いします。ちなみに、次もです。

6. 忘れられない夢

燃えてる。

一面、真っ赤に染まってる。

ついさっきまで、なんともなかったのに。

私のせいだ。

熱い。あつい。

お父さんが、出口を開けようとしてる。お母さんが叫んでる。私を、1番に出そうとしてる。

だめ。だめだよ。このままじゃ、二人とも死んじゃう。私のせいで。

そんなのやだよ。やだ。……嫌だ。

(嫌——!!!)

「……さん、蘭さん!」

覚えのある声で、蘭ははっと目が覚めた。肩を揺さぶっていた新一は、ほっと息をつく。

「大丈夫か? うなされてたけど」

「あ……大丈夫です。ちょっと転寝うたたねしちゃっただけだから。お帰りなさい、新一さん」

無理やり笑顔をつくって新一に対しながら、蘭は全身にかいた汗を感じていた。

彼は軽く目をしかめたが、ひとつ息をつくと、

「とにかく、もう寝なよ。あんまり夜更かししてつと、オレの健康がどうこういう前にそっちが体壊すぜ。オレは、夜食食べてから寝るから」

「はい……おやすみなさい」

彼が出て行くと、蘭は両手のひらを見つめた。じつとりと湿っている。

夢に見たのは、久しぶりだ。ここ数年は、前ほど頻繁には見なかった…あの時の夢。

(ここじゃ、だめなのかな…)

両親が、怒っている気がした。忘れるなど。

——蘭に、愛される資格なんかないんだと。

蘭は、与えられた部屋を見渡し、主の一家を思い出した。……彼らは、優しすぎる。

蘭が何をしたか知らないから、あんなふうに接してくれる。それでも、蘭には痛い優しさなのだ。

……過去を話すことなんて、今の自分には耐えられない事だけだ。
ど。

7. 気になる…?

「なあ、父さん」

「ん？」

朝っぱらから推理小説を読んでいた新一はふいに目を止めると、後ろを通りかかった優作を呼び止めた。ちなみに蘭は、朝食の用意のために台所にいる。

「蘭さんの両親、何で亡くなったんだろ？」

優作は、面白そうに目を光らせた。

「火事、だそうだ」

「……ってことは、父さんも気付いてたんだな。彼女の過去の闇に」
新一は半目で言った。質問に即答したということは、すでに調べたということだ。

「珍しいな、お前が他人の過去に興味をもつとは」

「……探偵の性だよ」

わずかに不機嫌になったような息子にひとつ苦笑すると、優作は自分の椅子に座った。

——嘘ではない。この子はそう思っているんだ。
自分では。

「ねえ、最近、工藤君と何かあったの？」

「え？」

友達の突然の台詞に、怪訝そうに蘭は振り向いた。

「だってさあ、よく話してるじゃない。もしかして…付き合ってるの？」

「ああ、それね」

蘭は笑った。別に、会話するようになったという自覚はなかったが、周囲から見るとそうらしい。それだけ、あの家での生活に慣れ

てきたという事か。

工藤邸に住むようになって、すでに2ヶ月が過ぎていた。

「違うよ。ちょっとした事情があって、工藤君の近所に住むようになっただけ。第一、あの工藤君が、私なんか相手にするわけないじゃない」

彼女はふんふんとうなずいた。

「…まあ、確かに。彼、あんなにカッコイイのに、噂の一つもたたないしねー」

「そうそう」

うなずきながら、蘭は新一をちらつと見た。

……噂がたたないのは、単に女性に興味がないだけだと思うけど。一緒に住んでる私にさえ、そんな素振りは全然ないし。

まあ、興味があったところで、今の生活をしていたら彼女なんかできるわけではないけど。

ただ、感じることはある。最初、有希子の話を聞いたときにも、思った。

——私と一緒にだ、と。

他人と深く関わらないように、線を引き、それを越えられないように、細心の注意を払っている。

違うのは、その理由。彼は単に、心を開く気がないだけだ。——

もしくは、今のクラスメートにその必要はないと思っているのか。

そう。背負うものの重さは、さほど変わらないかもしれない。でも、私とは違う。

背負うものの種類が、まったく。

8. 孤児院訪問

彼女が住んでいたという孤児院は、高校からさほど遠くない所にあった。多分、工藤邸からの距離と大差ない。

高校在学中にも関わらず仕事を探していたことといい、わざわざ住み込みを志望したことといい……。

「……まるで、どうしても出て行きたかったみたいだな」

つぶやいて、敷地内に入る。そこで遊んでいた子供たちに、すぐさま囲まれた。

「お兄さん誰ー？」

「怪しい人ー？」

本人に堂々と聞くとところが、子供らしい。新一は苦笑しつつ言った。

「オレは蘭：毛利蘭さんの知り合いだよ。院長さんと話したいんだけど」

反応は意外だった。

「もうり？」

「らんさん？」

「誰だっけ？」

なぜか首を傾げる子供達。答えを出したのは、10歳を少し越しているような、ショートカットの女の子だった。

「ああ、多分花ちゃんの事だよ。確か、本名そんな名前だったから」
一斉に「あゝ」と納得する子供達。少女はその子達にゲームを続けるよう言うのと、「こっちはです」と新一を案内した。

「いいの？オレが何者が確認しなくて」

「工藤新一さんでしょ？有名人の。花ちゃんから、ちらっと聞いたことあるから」

自分を覚えている名称が「高校生探偵」ではなく、単なる「有名

人」だということにさりげなく落胆したが、そこはポーカーフェイスで訊いてみた。

「へえ。なんて？」

返事は、これまた意外なものだった。

「高校でもすごい美形で、ちょっと私に似てる人って」

「似てる？」

「どういう事？」

そう訊こうとしたとき、少女は立ち止まった。

「院長！、お客さんだよ。花ちゃんのお友達」

中から扉を開けたのは、初老の婦人だった。新一が頭を下げる。

「初めまして。工藤新一といいます」

「ああ、花ちゃんの勤め先の方ですね。どうぞ。一度お話したかったわ」

少女に、みんなの所に戻るよう言うと、彼女は新一に椅子をすすめた。

「あの子は、よくやっていますか？」

「ええ。休日には、ここに帰ってきてるはずですが」

「ええ、まあ。ちゃんと3回とも、戻ってきてくれますよ。でも、なかなか話してくれないんです」

新一の表情が変わったことに気付かず、話を進める院長。

「……ところで、さっきちょっと、気になったことがあるんですが」

その後、穏やかに苦笑していた院長は、顔を曇らせることになった。

8. 孤児院訪問（後書き）

ちよつとのほほんとしていたら、いつの間にか1週間たっておりました！イカンイカン。

もう一方の連載がもうすぐ終わりますので、そしたらもうちよい早く更新できるかと。

いや、一度に二つのことを進めるってことができないんですね。

もうちよい待てばよかったかなあ、この話始めるの。

とはいえ、とりあえず1週間以上はあけないつもりですので、よろしくお願いします。

9. 帰れない理由

「じゃあ、お暇ごしやすみしますね」

「ええ。じゃあねー」

有希子の声を背に、蘭が、多くもない荷物を手に玄関で振り返る。その光景は、もう週末の恒例になっていた。――新一が口を挟まなければ。

「どこに行くんだ？」

「え？だから、孤児院に……」

「本当に？」

新一の口調と眼差しに、蘭は怯ひるんだ。それは、同級生兼家政婦に對するものではない。多少和らいでいるものの、推理する探偵のものだった。

「オレが昨日、孤児院に行ったと言っても？」

蘭の顔色が変わった。その意味を察して、うつむく。

「……いつから、気付いてたんですか？やっぱり、あの転寝うたたねしてた時ですか？」

「きっかけはそうだな。覚えてないだろうけど、あの時、うなされながら言ってたよ。『ごめんなさい』って……何度もな」

「……」

「それが気になって、孤児院に行ってみたんだ。院長さんと話したよ。蘭さん、これまで3度しか戻ってないんだってな」

『3回とも』戻った、と彼女は言ったが、蘭が休みのたびに戻っていたなら、10回は越していないと、おかしい。蘭がここで働き始めて4か月目。優作は、毎週末を休みにしていたのだから。それは、まだ高校生の蘭を氣遣ってのことだった。

「それで？本当はどこに？」

「……友達の家です。いつも、適当に理由をつけて」

「なぜ？あんなに優しい人たちじゃないか」

「……………」

蘭が答えないので、新一は自分で答えを言った。推測ではあるが、恐らく――。

「……優しい人たちだから、か？自分の闇を、思い知らされる、とか？」

血の気の引いていた蘭の顔が、青くなった。新一が目を細めたことにも、気付いていない。

「オレ相手に、隠し事はなかなかできないぜ。……話してみろよ」
そう言って、縮こまった蘭の頭をぽんとたたく。

――それで、^{たが}箠が外れた。蘭は、大粒の涙を流しはじめた。

「……全部、全部、私の……せいだったんです……………私が……………」

先ほどから成り行きを見守っていた新一の両親は目を見合わせ、静かに部屋を出ていった。

「……私が、両親を殺したんです……………！」

10. 懺悔（ざんげ）、贖罪（しょくざい）、罰

あれを放火というなら、日本で起きる火災の原因は全て放火といふべきだろう。

蘭には、そんなつもりは全くなかった。

それでも、蘭が生み出した火は家を焼き、両親の命を奪った。

12年前のあの日、蘭はマッチで遊んでいた。どんなきっかけで火がつき、しかも家に燃え移ったのかは、覚えていない。

ただ、炎の渦の中、必死に蘭を助けようとする両親の姿だけは、鮮明に記憶に残った。

孤児となった蘭は、孤児院に引き取られた。そして、心の穴を埋められればと、周りの大人たちは蘭をなぐさめようとした。

火事の原因に、気付いた大人もいただろう。しかし、誰も蘭を責めなかった。責められなかった。

——当然だ。ある日突然両親を亡くし、自分も火傷を負い、身も心もボロボロになったわずか5歳の少女を、誰が責められるものか。しかし、その周囲の気遣いが、逆に蘭を追い詰めた。周りが罰してくれないから、蘭は事あるごとに自分を罰してきた。楽しいこと、面白いことは極力、遠ざけてきた。親しい友人をつくるまいと常に壁をつくってきた。

今回、住み込みをわざわざ希望して働きだしたのも、そう。いつも気遣ってくれる人たちを、遠ざけるために。

「…孤児院で、名前を呼ばせなかったのも？」

新一が新たに出した話題にも、蘭はもう動揺しなかった。

孤児院を訪ねたとき、引っかかったのだ。

彼女の本名に、はじめ子供たちは反応しなかった。いくら渾名あだなになじんでいても、名前を聞いてピンとこないというのは、おかしい。

『あの子は昔から、名前で呼ばれることを嫌がりましてね。きっと、ご両親のことを思い出してしまうからでしょうね』

院長はそう言って表情を曇らせていたが、新一には予想がついた。

「——呼ばれる資格がないって、思ってたんだろ？」

蘭は黙ってうなずいた。

本名を名乗ることを、ずっと封じていた。両親を殺した自分に、両親がくれた名前を名乗る資格はない、と。だから適当に渾名をつけ、孤児院ではそれで通した。

蘭は、まだ涙をこぼしながら、微笑んだ。

「新一さんって、何でもわかつちゃうんですね。前にもいたんですか？ 私みたいな人が」

「……………」

新一は答えなかった。代わりに、蘭の頭を軽く寄せ、自分の肩にうずめさせた。

「……今更、我慢するなよ」

蘭の体が、びくっと震える。

「ひどい傷を負ったのに、治すことも、癒すこともできなかったんだ。……痛いに決まってる」

——10年以上の間、その傷からは血が流れつづけ、ずっと心を蝕んでいたんだから。

その言葉を合図に、蘭は今度こそ、声をあげて泣きだした。時折、

父と母を呼びながら。

10. 懺悔(ざんげ)、贖罪(しょくざい)、罰(後書き)

果てしなく暗い……。ということで、バックも暗くしてみました
が、いかがでしょうか。(赤よりはマシですよね?)

もうちょっと早く更新したかったんですが、長期連載を一つ終えた
ら気が抜けて、筆(???)が止まっておりました・イカンイカン。

11. 記憶の中の真実

「…ありがとう」

一頻り泣くと、蘭は目をはらしながら、ぽつりと言った。

「もういいのか？」

「ええ。…：すっきりしました」

10年もの間、誰にも言えなかった。声をあげて泣くことすら、できなかった。

その表情に、新一はまた目を細めると、気にかかっていたことを訊ねた。

「それでも、…：自分を許せないのか？」

蘭は、沈黙で肯定を示した。

「私は——変われません。この間、夢に見て…：わかりました。両親は、私を許していないんです」

「………」

新一は、直接は反論しなかった。当時のことを知らない彼が何を言っても、説得力がない。——それに、彼は探偵。彼女を説き伏せるのは、一般論でも感情論でもない。…：恐らく、彼女自身の記憶だから。

「ご両親、どうしてた？」

「え？」

「蘭さんを火の手から出すとき、どうしてた？何か、言ってなかったか？」

蘭は思い起こした。あのとき、炎の中で叫んでいたのは——母。

「叫んで…：いました」

「なんて？」

『早く、早く逃げて！いきなさい！！』

「逃げて…行きなさいって」

「だろ？」

急に明るくなった声に、蘭は顔を上げた。彼は、笑っている。

「ご両親は、蘭さんがしたことに気付いてたかもしれない。いや、多分そうだと思うよ。それでも、全力で蘭さんを逃がした。その『いきなさい』って言葉は、火事場から逃げろって意味の他に、生きてくれているという意味もあったんじゃないかな」

「……」

蘭は目を睜みはった。あの日から、何度も何度も夢に見たあの時のこと。

——そうだ。いつだってお父さんとお母さんは、私を逃がそうとしてくれた。

恐怖に塗りつぶされそうな記憶の中で、それだけは、心に焼き付いていたというのに。

「…私、覚えていたのに……。それだけは、…ちゃんと覚えていたのに」

蘭の頬を、また涙がつたう。

どうして自分は、それに気付かなかったのだろう。それを、否定しつづけてきたのだろう。真実ほんとうのことは、いつだってそこにあったというのに。

「蘭さん、自分を責めるなよ」

涙をぬぐう蘭の手を、新一は静かにどけた。

「仕方ないよ。蘭さんはまだ小さかった。両親を亡くして、心に傷を負って……。そこまで気付く余裕なんか、なかっただろ？」

「……………私は…」

それきり、言葉が続かなかった。新一は蘭の頭を軽くなでると、リビングのソファに座らせた。

「傷を消すことは、オレにはできない。蘭さん自身にも、多分できないだろう。けど、傷を癒すことはできる。」

……蘭さんはもう、自分の幸せを望んでもいいと思うよ」

蘭はかすかに唇を動かした。考えたこともなかった。私の、幸せ――。

「とりあえず、今夜はここで寝なよ。頭が混乱してるだろ。大丈夫、オレがここで見てるから」

その一言で、なぜかすごく安心できた。言われた通りに横になると、強烈に睡魔が襲ってきた。蘭は最後の意識で、つぶやくように言った。

「……ありがとう……」

そして、静かに寝息をたて始めた。

11. 記憶の中の真実（後書き）

えんらい間があきました。我ながら長かった・・・。

最近、風邪と偏頭痛が重なって、思考能力がガタ落ちしていたのです。おかげで本文も長くなってしまいました。

まあ、よーやく第一のヤマ終了！残るは、ラブストーリーにはつきものの、あのネタですな。

12. 親子の対話

「終わったな」

音もなく、リビングに入ってきた父に、新一は静かに振り返ると、うなずくかわりに瞳を伏せた。

「…なんで、オレに任せたんだけ？父さん」

彼女の心の闇には、新一よりも優作のほうが早くから気付いていた。12年前の火事の詳細も、蘭がいた孤児院の場所も、調べたのは優作。しかし、彼はその情報をまるごと新一に渡し、手を引いた。

——彼女の心、お前が開いてみせろといわんばかりに。

「お前のほうがいいと思ってな。俺のは、ただの興味本位だから」
「……………」

彼女の心を開くのは、優作ではなく、新一であるべきだと。新一が純粹に彼女を助けたいと思っていたことぐらい、とっくに気付いていたから。

「…こういうのは、父さんの方がうまく言葉を選べたと思うけど」

新一がいつもやっているのは、犯罪を暴き、問い詰めること。慰め、救いあげるのは、正直専門外だ。

「しかし、俺がどう言葉を使っても、結局は野次馬の延長だからな。お前は違う。…わかっているだろう」

「……………」

新一は、少しだけすねたように父を見た。…そう、もうわかっている。自分が、なぜ彼女の悪夢を振り払うことにこだわったのか。

そして、目を泣きはらして真っ赤にしながら、しかし穏やかな顔で眠る蘭に、目を移す。

「……もう、過去の幻影なんか見せたくねーな……」

ほとんど囁くようにつぶやいた声は、それでも物音一つない静か

なりビングに響いた。優作は黙って新一に背を向けると、自分の寝室へと消えた。

だから、彼が「父親の顔」で微笑んでいたことに、新一は気付くことはなかった。

12. 親子の対話（後書き）

あのまま場面終わっても良かったんですが、何となく付け足してみました。いかがでしょう？次からは本当に、後半のネタに入ります。

13. 翳った空模様

「新一さんは、やっぱり東都大学なの？」

さして興味もなさそうに大学の偏差値リストを見ていた新一は、その声に顔を上げた。

「…来てたなら、声ぐらいかけてくれよ」

「かけたじゃない、今」

「……そうじゃなくて」

挨拶ぐらいしろよ、という言葉は出るまえに消えた。一応、蘭とはすでに挨拶しているのだ……家で。

受験を控えたこの時期には、ふたりはもうすっかり、公式にも『友人』になっていた。

あの時以来、過去からふっきれた蘭は、自分を広げることに出し、今度こそ友人を増やしていた。そして新一も引っぱりこみ、前以上の人気者になっていた。

「蘭さんは受けないのか？ 大学」

「ええ」

蘭は苦笑した。

「元々、高校も通う気なかったし。ちゃんと就職して、自活するつもり」

新一の顔がわずかに歪んだことに気付かず、蘭は次の授業のため、教室に戻っていった。

教諭が入ってきて、生徒が慌しく席につく中、新一はぼそりと呟いた。

「……まったく」

本当に全然気付いてねーのかな、あいつ。

彼女とクラスがまた離れ、合間にしか顔を見られないことを悲し

むべきか、今のこの顔を見られずにすむことを喜ぶべきか、しばし悩む新一だった。

「ただいま帰り……あら？」

いつも通りにスーパーに寄って買い物を済ませた蘭は、玄関に入るなり聞こえてきた声に首を傾げた。

声の主である新一は、彼女の帰宅にも気付かないようだった。よく見れば、相手は優作だ。

「だから、何でそんないきなり……！」

「あ、あの……」

おずおずとした蘭の声に、ようやく振り返った新一は、一瞬固まった後、目をそらす。

「ああ、お帰り蘭さん。夕食の支度を頼むよ。その新一は、気になくていいから」

至って温和な優作に従い、蘭は新一を気にしつつ、台所に向かった。それを合図に、優作は新一の横を通りすぎて一言言うと、書斎に入ってしまった。

「まあ、時間はある。考えておけ」

「あの、何かあったんですか？」

うつむいたままの新一に、遠慮がちに問う。新一は目をそらしたまま、唸るように言った。

「：言ったら。家でも二人だけの時は、敬語使うなって」

蘭は工藤邸では、常に敬語だった。学校では砕けた口調だが、それは学校では『友人』だからだった。未だに、家政婦云々の件は伏せていたから。

「……悪い。今ちょっと混乱してっから。落ち着いたら、話す」
夕飯いらない、とだけ言うと、新一は自室に去っていった。

14. 晴天の霹靂（へきれき）

「蘭ちゃん、ちょっといいかしら？」

夕食の後、蘭を遠慮がちに呼び出したのは有希子だった。

その声に新一も反応し、ちらっと視線を向ける。

あの日から1週間、珍しく情緒不安定な新一は、無言でリビングから出て行った。それを視界の端で見届けた有希子は蘭をソファに座らせると、自分は向かいに座った。

「実は、大事な話があつてね。……私と優作、来年の春に、アメリカに引っ越す事にしたの」

目を見開いたまま、停止する蘭。予想通りの反応に、有希子はらしくなくうなだれた。

優作の小説は、今や世界的な人気を集めている。海外のファンも多く、いっそ拠点を移してはどうか、という話があったのは、実は蘭を雇った直後だった。

有希子も女優業が好調、というか絶頂で、今度ハリウッドでデビューする事が、内々で決定していた。

それぞれ、世界でも十分通用するふたりが渡米をためらっていたのは、まだ未成年で、一人暮らしをするには若干不安の残る、息子のことだった。

「新一がもし、日本に残りたいって言ったら、そうさせてあげようと思ってたの。ただ、あの子家事能力は今ひとつだから、あらかじめ信頼できる人を家に入れておこうと思ったのもあって、あなたを雇ったのよ。」

ただ、あの子と一緒にアメリカに行くっていった場合……あなたをアメリカまで連れて行くわけには、さすがにいかないわ。だから、早めに話をしておこうと思ってね」

「……そう、ですか」

蘭が事情を理解するまでに、しばらく時間がかかった。

「いつ、日本を発つ予定なんですか？」

「来年、3月中ごろの予定よ」

そして、混乱してうつむいた蘭の肩を優しくたたく。

「とりあえず、話を聞いてくれただけでいいから。何も明日いなくなるって訳じゃないから。ね？」

言葉もなくうなずく蘭を残し、有希子はリビングを出た。

「何で、もっと早く言わなかったんだよ」

真横で、出ていったはずの新一の声がした。

「あら新ちゃん。立ち聞き？」

新一は黙殺した。

「昨日の週刊誌で騒いでた。ってことは、1か月は前から決定してた事なんだろう？オレはともかく、あいつを振り回すのはやめろよな」
「あら、1週間、蘭ちゃんに切り出せなかった新ちゃんに言えるのかしら？そんなこと」

済まして返しておいて、有希子は表情を変えた。

「新ちゃんは、どうするの？蘭ちゃんに関しては、新ちゃん次第なのよ？」

新一の決断によって、蘭の今後も決まる。

新一が両親とアメリカに行くなら、蘭は解雇。次の仕事先を探す時間を考えると、引越し前に工藤家を去ることになる。

新一が残る場合、蘭にも選択肢は残る。契約を新一が引き継ぎ、今後も家政婦として家に残るか、本人の予定どおり家政婦を辞め、別の仕事を見つけて自活するか。

「オレは日本に残る。日本でも、探偵業は十分できるしな」

それに——。新一は、物音一つしないリビングに目をやった。

彼女は気付くだろうか。本当は、もうひとつ選択肢がある事に。
しかし、それに気付くためには、彼女が自分の心と、とことん向き合うことが必要だけれど。

14. 晴天の霹靂（へきれき）（後書き）

もう中盤越えているはずなのに、なぜか終わる気配がありません・
・。というか、当初の予定よりかなりスローリー展開なので、もう
いっそ、とんとん拍子に一大決心させてやろうかと思案中です。

15. 不可解な焦燥感

——どうして、なんだろう……？

蘭は混乱していた。

アメリカ移住という、突然ともいえる有希子の話と、……自分
の動揺に。

元々、家政婦は高校卒業前に辞めるつもりだった。工藤一家と離
れることになる、その結果は同じなのに。……何だろう？この焦燥感
は——？

「蘭さん？どうした？」

後ろからかかった声に、蘭ははっと振り向いた。気遣わしげな新
一が、いささか居心地悪そうに立っている。朝食の片付けを終えて、
ぼーっとしていたらしい。

「あ……ごめんなさい。何でもないわ」

慌てて横を通りすぎようとして、彼のつぶやくような言葉に、足
が止まった。

「……悪い。急にあんな話して……驚いたよな」

振り向いて見えた彼の顔は、見たこともない、つらそうな顔。こ
の家ではいつも年相応な彼だが、今だけは、少し幼く見えた。

「……新一さんも、アメリカに？」

少し、間があった。新一は短く息をつく。

「悪いな。あの二人、あの通りのマイペース夫婦で。でも、あれで
オレ達のことまで一応考えてはいるんだ。この時期に話をしたのは、
オレがどっちの大学も選べるようになって事らしいし。蘭さんも、少
なくとも今年中はまだ、いてくれるだろ？」

ようやく普段の顔に戻ってきた新一に、蘭は少し安心して、「そ
うね」と答えた。

——そう、まだ時間はある。もうしばらくは、彼らと……彼と一緒になれる。

蘭はそう、自分の心に言い聞かせた。

……結局、蘭の問いに新一が答えることはなかった。

16. 花の行方

受験を間近に控えた頃、蘭は友人を引き連れ、新一のクラスを訪れるようになっていた。

「最近、呼び出し少ないわよね。やっぱり受験ってことで、気を遣ってるのかしら」

さすがに、受験生をあちこち引っぱりまわす訳にはいかない、ということか、最近は協力要請も減って、新一も『普通の受験生』に近い生活になってきた。

「別に、受験勉強より実際の事件の方がずっと面白いから、構わねーんだけどな」

新一の不謹慎な台詞にあわせるように始業ベルが鳴り、蘭は園子とともに自分のクラスへ戻った。

「にしても、本当に大学受けないの？奨学金だってもらえるだろうに……」

「いいよ。大学に行かなくなたって、働き口ぐらいあるし。それより、卒業したら、園子にも会えなくなっちゃうね」

すっかり親しくなっていた彼女に、蘭は寂しそうにもらす。

とたんに、背中をバシンとたたかれた。そして見えたのは、いつもとまったく変わらない、親友の笑顔。

「落ち込むことないって！ちよつとぐらい離れたって、友達友達なんだから！それに、なにも一生会えなくなる訳じゃないしさ」

「え……？」

丁度席に到着したので口をつぐんだ蘭は、今のその言葉を反芻はんすうした。

「……もしかして……」

玄関を入ると、見慣れたヒール靴が目に入り、新一は少々驚いた。
(……珍しいな。この時間に帰ってるなんて)

「母さん？　どうかしたのか？」

リビングに入るなり声をかけた息子に、有希子はいきなり口をとがらせた。

「もう新ちゃん、いつまでかかっているのよ？」

「はあ？」

「早く蘭ちゃん口説かないと、手遅れになるかもしれないわよ？」

「……、…っ!？」

一瞬ポカンとした新一だが、その意味を察するや、真っ赤になった。

「いつ、いきなり何だよ！　つか、本当にそのために、アメリカ行き決めたのかよ!？」

「あら、もちろん違うわよ。ただ、いいチャンスになるかもって思ってたね、優作とふたりで決めたのよ」

焦る新一に、余裕の顔で返す有希子。海外移住なんていう決断を、息子に相談せず決定するところが、この夫婦の浮世離れしたところだ。

「とにかく、早い所口説いちゃいなさいよ！　じゃないと、大事な花が折れたり、誰かに取られちゃうかもしれないんだから」

言い放つと、まことに珍しく夕食の準備を始めた有希子。新一は、そつとため息をついた。

「……普通、親が率先してすることか？」

自分の奥手さはこのさい棚に上げて、ぶつぶつ言いつつ、自室に引き上げる新一だった。

16. 花の行方（後書き）

気が付いたら、もう20話間近！10話ぐらいで終わる予定だったのに……。大トロでごめんなさい。

この話の後半のテーマは、恋愛ものには必須のあの話題です。にしても、書きながら、何が言いたいのかわからなくなってくるのが情けない……。

15. 求婚

年の瀬も迫ってきた頃、新一は両親が出かけた時を見計らい（とうか、両親が気を遣ってふたりで出かけたのかも知れないが）、口火を切った。

「蘭さん、仕事は決まったのか？」

「ああ、まだ。業種にはこだわらないし、もう少しのんびり高校生活しようかと思って。」

新一さんこそ、アメリカ行き決めたの？」

「——いや。オレは最初から、アメリカに行く気はないよ」

その答えに、蘭は目を見開いた。確か、前に尋ねたときは……。「……意地悪したの？ 私が困るようになって？」

「違う」

苦笑まじりに答えてから、新一はまっすぐに蘭を見つめ、また口を開いた。

「賭けの、一つだったんだ」

「賭け……？」

「オレがアメリカに行くかもしれないって仄めかせば、蘭さんも、少しは心配になるかもってな」

新一の顔が心なしに赤いことに蘭が気付いた、次の瞬間だった。

「……オレ、蘭さんが好きだ」

すぐさま、蘭の頬が赤く染まる。しかし、話はそれで終わらなかった。

「高校卒業したら、結婚してほしい」

「……え……」

予想もしない言葉の連続に、蘭はしばし沈黙した。あちこちうろうろと視線をさまよわせ、口を開くも、言葉が出てこない。

「もちろん、蘭さんが嫌だっというなら、無理にとは言わない」

ここで、新一の顔がいたずらっぽくなった。

「けど、オレ昔から欲しいものは何でも手に入れるたちだから、振り向いてくれるまで、これからも口説くと思うけどな」

いつから恋していたかは、よくわからない。

ただ、きっとあの時からだと思う。転寝^{うたたね}する彼女の目に、涙を見たあの日。

——彼女にだけは、泣いてほしくない。そう思ったのだ。

「…で、でも、優作さんや有希子さんが何ていうか……」

あのふたりは蘭を気に入ってはいたが、息子の嫁となれば話は別のはず。が、新一は心配を粉碎した。

「ああ、それは問題なし。そもそも、アメリカ行きにオレを巻き込んだのは、蘭さんとの事を見かねてのことだから」

生来、ほとんどのことには要領の良すぎる息子のあまりの奥手さに、『新一がアメリカに行くかもしれない』と、有希子は蘭に吹き込んだのだ。

新一には最初から、行く気はなかった。何の約束もしていない蘭を置いてアメリカになんか行って、戻ったら彼氏がいた、なんて事になったら、後悔を通りこして笑えない事態になることうけあいだ。

問題は、蘭の気持ちのみ。そして——それは蘭自身、つい最近まで気付いていなかったことだ。

18. 返答（前書き）

後書きに、ちよつとお知らせがあります。
興味のある方は最後までどうぞ。

18. 返答

「…じゃあ、今度ちゃんとお礼言わなきゃ」

その言葉に、じっと蘭の反応を待っていた新一は、思わず蘭の肩をつかんだ。

「いいのか？本当に？」

蘭はうなずいた。その目には、涙が光っている。

「私、ずっとわからなかった。あの話を聞いて、どうしてあんなに動揺したのか。だって、私は工藤の人間じゃない。いつか別れることになるのは、当然なもの。」

でも、園子と話してて、わかったの。あの言葉で」

『なにも、一生会えなくなる訳じゃないんだから』

新一がアメリカに行ってしまったら、もしかしたら一生会えなくなるかもしれない。それが怖かった。——本当はずっと、新一が好きだったから。

いつからだったかは、よくわからない。悪夢にうなされた自分を氣遣ってくれた、あの時かもしれない。心の傷をまるごと包んでくれた、あの時だったかもしれない。

「私を新一さんのお嫁さんにして、ずっと……そばにいさせて下さい」

蘭の頬を、涙が伝っていく。それを指でぬぐいながら、新一は嬉しそうに微笑んだ。

「けどオレたち、まだ未成年な上に、高校卒業してねえから、卒業まで、とりあえず婚約って事でいいかな？」

蘭は目をぱちくりさせた。……確かに、高校在学中の入籍はさす

がに認められないだろう。

「そうね」

「じゃ、婚約成立の証として、一ついいか？」

「何？」

「ふたりきりの時だけでいいから、『さん』づけはやめようぜ。な

……『蘭』」

「……」

そういえば、いまだにお互い『さん』づけだった。新一の真っ赤な顔には気付かないふりをして、蘭は笑った。

「そうね。未来のお嫁さんとして……『新一』」

新一はうれしそうに、蘭を引き寄せ、抱きしめた。優しく、力強く。

自分の鼓動を聞かせるように。彼女の涙を受け止めるように。

18. 返答（後書き）

作者の予想を大きく裏切り、長々ときたこの話も、ようやく終わらせられました。はぁ疲れた（↑自業自得？）。

そして、気がついたら総アクセス数が10,000突破してありました。皆様ありがとうございます！ついでに感想など送って頂けたら嬉しいです。

ところで、ちょっとお知らせがあります。先月に連載終わらせた時間も告知したんですが、しばらく執筆お休みします。

というのは、作者登録して書くようになってから、いつも『書く側』目線で小説を見るようになってしまい、純粹に読書を楽しむことができなくなってきたように感じるんです。断っておきますが、私にとってここは完全な趣味の領域ですので。

という訳で、息抜きも兼ねてしばらく『読む側』にまわろうと思います。

また、「これ投稿したい」と思う展開が浮かびましたら復帰しようと思います。

後書きまで読んで下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3969d/>

消せない傷

2010年10月8日14時29分発行